



坂本昌彦

日本ミニバスケットボール連盟理事長  
神奈川県バスケットボール協会副会長  
1953年7月30日生まれ、北海道出身

現在、バスケットボール界ではさまざまな改革が行われようとしている。それは、ミニバスケットボール界においても同様である。以前より議論がなされてきた『ゾーン・ディフェンス』の禁止や、全国大会の『4校区制限』について、日本ミニバスケットボール連盟の坂本昌彦理事長にお話をうかがった。

# 勝利至上主義ではなく 子どもたちの成長を共に喜びたい

インタビュー／飯田康二(月刊バスケットボール)

## ゾーン・ディフェンスは 禁止だ

ミニバスケットボールにおいても、ゾーン・ディフェンス禁止のルールを導入することが決まったようかいました。

「国際連盟(FIBA)の規定しているミニバスケットボールのルールにおいて、ゾーン・ディフェンスが禁じられていることもあり、日本ミニバスケットボール連盟でもゾーン・ディフェンスの禁止を検討してきました。ご存じのように、日本バスケットボール協会がFIBAから制裁を受けたこともあり、ミニバス連盟としても、これを機に改革を進めなければいけない思いがあります。また、現在、改革の中心となるFIBAのタスクフォースでは、アンダーカテゴリーの強化についても話し合われています。ゾーン・ディフェンスの禁止については低年齢層における将来的な競技力の向上を考慮し、15歳以下のカテゴリーでのゾーン・ディフェンスの禁止を検討されています。当然ミニバスも含まれるわけですね」

「そもそも、ミニバスケットボールにおけるゾーン・ディフェンスの弊害とはどういったことなのでしょうか。」

「マンツーマンでのディフェンス、オフエンスといった攻防を身に付ける前に、ゾーン・ディ

フェンスを導入してしまつたことは、選手の成長を妨げるといったことが指摘されていますし、それが世界的な潮流でもあります。

また、ミニバスケットボールに関して言えば、単に選手の強化ということではなく、普及や育成といった部分に重きを置いています。つまり、多くの子どもたちにバスケットボールの楽しさを知ってもらいたいということが大前提にあるのです。そのための一つとして、まずはシュートを入れる楽しさを知ってもらいたいと思っています。

シュートが最も入るのはゴールに近いところですね。ゴール近くのシュートを大切に、シュートが入る喜びを知ってもらいたい。そして、今度は相手かわりしてシュートを決めれば、もっとうれしいでしょう。バスをもらつてシュートを決められたらさらに楽しい。バスを出した選手も楽しい。そんなふうに段階的に、バスケットボールの楽しさを実感しながら成長して欲しいのです。バスケットボールはチームスポーツですから、一緒にプレイする仲間がいるから楽しさ、喜びがより膨らみます。それは一緒にゲームをする相手も同様で、ゲームをできる相手がいるから楽しめる。だから、相手を「敵」ではなく一緒にプレイする「仲間」として、共に成長して欲しい。そうしたい。そうしたい。それがミニバスの原点としてあるのです」

確かに、ゾーン・ディフェンスは、ゴール近くからのシュートを防ぎ、アウトサイドからシュートを打たせようといったことが狙いになります。外からのシュートはどうしても確率が低くなりますし、カのない子どもたちにとっては、大人よりも顕著にその効果が表れますね。ゾーン・ディフェンス以外にも、ミニバスでしか通用しないプレイをよく見かけます。

「そのようにして自分たちのチームが勝つことだけを目標とするというのは、ミニバスケットボールが求めていることは、やはり違うのではないかと思っています。勝利至上主義でいけば、ゾーン・ディフェンスは有効かもしれませんが、一人一人にディフェンスの仕方を一から教えていくより、指導も楽かもしれません。もちろん、指導をきちんとした上で、ゾーン・ディフェンスを採用している指導者もいることは分かっていますが、一方で、相手チームの子どもたちからバスケットボールの楽しさを奪ってしまうかねません。ミニバスケットボールの年代では、そうしてチームが勝つことよりも、子どもたち一人一人が成長していくことを第一とし、その成長の喜びを指導者や保護者たちにも共感してもらいたいですね」

「日本でも以前、ゾーン禁止のルールを採用していたそうですね。それはなぜ続けられなかったのでしょうか。」



「1980年代終盤にゾーン・ディフェンスを禁止するルールを試行しました。4年間ほどでしたが、そのときはルールの整備もままならず、リフェリーが試合中にゾーンか否かを判断するといったやり方だったので、現場ではとても混乱したのです。ゾーンかマンツーマンかを判断することは、とても難しい要素を含みます。リフェリーがゾーンだと判断しても、そうではないと反論をされたり、逆に相手チームや周囲から、ゾーンだと指摘されたり。相手を離して守っているのか、ゾーンなのか。スウィッチなどもあるわけですからね。そうして現場は混乱し、収拾が付かなくなった一方で、ゾーンを禁止したことの効果の検証といったものは一切行われなかった。それで続けられなかったのです。」

今回はその反省から、できるだけルール上の整備も進めたいと思っていますし、映像などで分かりやすく伝えられるようにしていきたいと思っています。しかし、いくらルールを整備しても、そのルールの抜け道を探したり、逆手に取るようなことを考えるチームが出てくることも事実です。ですから、何のためにゾーン・ディフェンスを禁止にするのかといったことを、よく理解してもらいたいわけです。それは、自チームが勝つことだけを目的とするのではなく、ミニバスケットボールの選手たち一人一人の成長が第一にあるということです。」

## 校数制限の緩和と全国大会の在り方

全国大会における校数制限への不満の声もよく耳にします。

「もともと必要があったから生まれたルールですが、校区数の制限だけでなく、全国大会の在り方自体を考えていかなければならないと思っています。」

平成24年度の全国大会から4校区制限については一部緩和しました。原則は「4校区以内で構成・活動している単独チーム」なのですが、児童数の減少など、地域の事情でチームが形成できない場合などは、4校区を超えている場合でも特例を認めるとしたわけです。つまり、「強化」のために選手を集めたチームでなければ、参加を認めようという考えですが、強化が否かは分かりづらい部分もあり、今後も検討をし、改善していかなければと考えています。そもそも全国大会に関しても、以前のような交歓大会形式に戻した方がいいのではといった考え方もあります。同年代のバスケットボールを楽しむ選手たちが、日本全国から集まり、友好するといった場合は、とても貴重なものだと考えていますし、他国から同年代のチームを招待するなどのアイデアもあります。新たな魅力のある、より良い大会の姿を求めていきたいと思っています。

一方で、強化につながる考え方も必要な時期にきています。日本協会が推進するエンデバー（一貫強化システム）を、U-12（12歳以下）でも採り入れ始めているのですが、これまでは、いわゆるピックアップ（選抜型）ではなく、希望者が参加できるような形で進めてきました。しかし、やはり同年代の中で、優れた能力を持つ選手がいることも事実ですし、そうした選手たちに、より良い環境の下で指導を受けるチャンスを与えることも必要なのだろうと思います。サッカーなどの他の競技では、現在、盛んにそうしたエリート強化が行われていることも

ありますし、バスケットボールの選手たちにも、そうしたチャンスがあるべきでしょう。

全国大会を交歓大会として、普及の場としての位置付けをはっきりとし、一方で、エンデバーによって選ばれた、ブロック選抜チームによるトーナメント戦を並行して開催するといったことも考えられます。現在、日本のバスケットボール界は、タスクフォースによる改革が推し進められているわけですから、この機会に、ミニバスケットボール界も現状に即し、何が子どもたちのためになるのかを考えながら、改革していければいいと考えています。」

## ゾーン・ディフェンスの禁止

バスケットボールの導入期には、将来的な成長を考慮し、1対1の対人関係による攻防を身に付けた方がいいとする考え方で、国際連盟のミニバスケットボールのルールにも、ゾーン・ディフェンスの禁止が規定されている。ゴール近く、ペイントエリア周辺の狭いエリアでゾーン・ディフェンスをすることで、対戦相手はアウトサイド・シュートを強いられる。また、ディフェンスも動き回る範囲が小さく、個々の選手の上達につながらないケースが多いことなどが指摘されている。

## 4校区数制限

全国大会に出場するために、選抜チームを作ることを制限するために生まれた規定。全国ミニバスケットボール大会に出場するチームは、登録選手が通う小学校が4校以内で構成されていなければならないとし、平成9年度より実施。勝利至上に走るあまり、選手の引き抜きが行われたり、同地域内で一定のチームに選手が集まり、他チームに選手が集まらないといったことを防ぐためであった。現在は少子化などの影響もあり、多数の学校から選手を募らないとチームを維持できないといったことから、規定の見直しを求める声も多い。